



基于教学语法观的 日语复合格助词研究

—— 谢冬 著 ——



WUHAN UNIVERSITY PRESS

武汉大学出版社



湖南省哲学社会科学规划基金（15YBA026）项目成果

基于教学语法观的 日语复合格助词研究

—— 谢冬 著 ——



WUHAN UNIVERSITY PRESS

武汉大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

基于教学语法观的日语复合合格助词研究/谢冬著. —武汉:武汉大学出版社, 2017. 9

ISBN 978-7-307-19755-8

I. 基… II. 谢… III. 日语—助词—教学研究 IV. H369.35

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2017)第 247912 号

责任编辑:叶玲利

责任校对:汪欣怡

版式设计:汪冰滢

出版发行:武汉大学出版社 (430072 武昌 珞珈山)

(电子邮件: cbs22@whu.edu.cn 网址: www.wdp.com.cn)

印刷:虎彩印艺股份有限公司

开本: 880 × 1230 1/32 印张: 6.125 字数: 165 千字 插页: 1

版次: 2017 年 9 月第 1 版 2017 年 9 月第 1 次印刷

ISBN 978-7-307-19755-8 定价: 29.00 元

版权所有, 不得翻印; 凡购买我社的图书, 如有质量问题, 请与当地图书销售部门联系调换

目 次

第一章 序論	1
1.研究の目的と意義	1
2.考察対象	5
3.研究方法と資料	10
4.本書の構成	13
第二章 日本語教育文法と複合格助詞研究	16
1.日本語教育文法の概観	16
2.日本語における複合格助詞研究	25
3.日本語教育文法の観点からみる複合格助詞研究	30
第三章 教材の第二言語習得における役割	
—翻訳調査からみる中国語の介詞“对”及びその関連形式 と対応する日本語の複合格助詞—	33
0.はじめに	33
1.先行研究	35
2.調査方法	37
3.調査結果	40
4.考察	43
5.まとめ	48

第四章 中国語を母語とする日本語学習者向けの「にとって」	
に関する教材開発	50
0.はじめに	50
1.コーパス調査	52
2.教材における「にとって」の扱われ方とその問題点	54
3.「にとって」の指導上必要な項目	56
4.教材における「にとって」の扱い方に関する提案	68
第五章 中国語を母語とする日本語学習者向けの「として(は)」	
に関する教材開発	70
0.はじめに	70
1.コーパス調査	72
2.教材における「として」の扱われ方とその問題点	77
3.「として」、「としては」の指導上必要な項目	81
4.教材における「として」、「としては」の扱い方に関する 提案	103
第六章 中国語を母語とする日本語学習者向けの「について	
(は)」に関する教材開発	106
0.はじめに	106
1.「について」と「については」を分ける基準	109
2.コーパス調査	114
3.教材における「について」の扱われ方とその問題点	116
4.「について」、「については」の指導上必要な項目	118
5.教材における「について」、「については」の扱い方に関 する提案	129

第七章 中国語を母語とする日本語学習者向けの「に対して」 に関する教材開発	
—「対象」を表す用法を中心に—	132
0.はじめに	132
1.コーパス調査	134
2.教材における「に対して」の扱われ方とその問題点	138
3.「に対して」の指導上必要な項目	143
4.教材における「に対して」の扱い方に関する提案	153
第八章 結論	154
1.本書のまとめ	154
2.今後の課題	158
参考文献	160
付録1 「にとって」、「として(は)」、「について(は)」、「に対して」 の文法ハンドブック	166
付録2 「にとって」、「として(は)」、「について(は)」、「に対して」 的語法手冊	179
謝辞	191

第一章

序 論

1. 研究の目的と意義

「について」、「によって」などの形式は「が・を・に・へ・と」などの格助詞の代わりに名詞句と述語との関係を表すように、格助詞相当の役割を果たしているため、複合格助詞と呼ばれている(庵他2001)。これらの複合格助詞はフォーマルな文体やより複雑な構造を持つ文に使われることが多く、教科書では初中級レベルの文法項目として導入されるのが一般的である。

複合格助詞が用いられる理由として、庵他(2001: 14)では「多様な意味を持つ格の意味をよりはっきりさせるためや、格助詞では言い表せない(言い表しにくい)意味を表すため」といった二点が挙げられている。「が・を・に・へ・と」などの格助詞で大体の意味が表せるため、複合格助詞を扱う重要度と必要度は問われるかもしれない。しかし、日本語学習者①は将来大学院に進学したり、会社で専門的な翻訳職に就くことを目標とするため、複合格助詞はレポー

① 日本語学習者は中国国内の大学で日本語を専攻とする学習者のことを言う。

トや論文、文書を書いたり読んだりするときに欠かせない文法項目の一つと考えられる。

複合格助詞は格助詞に比べ、形式上の複雑さに加え、意味用法を理解する上での難しさによってその習得は難しいと言われており、その中でも「にとって」、「として(は)」、「について(は)」、「に対して」などは母語の影響との関わりから、中国語を母語とする日本語学習者にとってその使い分けが困難であると言われている(張 2001、沈 2009)。

複合格助詞はこのように軽視されがちであり、また形式・意味上の難しさなどにより、日本語の「複合格助詞」に関する研究は格助詞よりずいぶん遅れている。従来の研究は、複合格助詞の認定基準や分類などに重点を置いている。確かに、認定基準や分類に関する記述は、日本語学においては欠かせないものである。しかし、日本語学習者の視点からはこれらの形式の文法的位置づけはそれほど意味を持たず、むしろ個々の複合格助詞がどのような意味を表すか、またどのようなときに使うかに関心があるであろう。さらに、個々の複合格助詞の意味用法を考察している先行研究はあるものの、文法説明にわかりにくい用語が用いられていたり、意味用法の分類が煩雑になりすぎたりして、そのまま教育現場に持ち込める形で整備されていないのが実情である。日本語教育の観点からなされた複合格助詞に関する記述は、主に文型辞典、例えば『日本語表現文型』(1989)、『日本語誤用例文小辞典』(1997)、『日本語文法ハンドブック』(2001)、『日本語表現文型辞典』(2007)などで取り上げられている。これらの文型辞典では、主として個々の複合格助詞の意味用法を簡潔に紹介することが目的とされており、学習者の母語に応じた詳細な記述^①が行われていないことや、各複合格助詞の使用

① 例えば、友松悦子・宮本淳・和栗雅子編『日本語表現文型辞典』(2007)では日本語の解説がそのまま中国語に翻訳されているだけで、中国語を母語とする日本語学習者の特徴を考慮した記述とは言いがたい。

条件が提示されていないという問題点が指摘できる。また前述したように中国語を母語とする日本語学習者の視点から母語の影響に関する記述は散見されるものの、これらの誤用をなくす指導法までは考察されていない。

一方、主に日本語学の成果を取り入れて開発された日本語の総合教材を見てみると、複合格助詞に関する解説は中国語訳などが与えられているだけである。さらに、意味用法の提示が不十分であったり、与えられていなかったり、典型的な例文が挙げられていなかったり、誤解を招きやすかったり、また使用条件や中国語訳とのずれが提示されていないという問題点も見られる。

このように、日本語学側における複合格助詞の記述が教育現場に持ち込める形で整備されていない一方、日本語教育においても複合格助詞の導入について数多くの問題点が見られるのである。

そこで本書は2000年以降盛んになってきた日本語教育文法の観点から、中国語を母語とする日本語学習者向けの複合格助詞「にとって」、「として(は)」、「について(は)」、「に対して」に関する教材開発を行うことを目的とする。具体的には次の三点を研究の目的とする。第一の目的は、日本語母語話者における複合格助詞の使用実態を把握するために、大規模コーパスを利用し、「にとって」、「として(は)」、「について(は)」、「に対して」の前後にくる語を解明することである。第二の目的は、主に日本語学の成果を取り入れて開発された日本語の総合教材における複合格助詞の扱われ方を見るために、現在中国で広く使われる中国語を母語とする日本語学習者向けの総合教材における「にとって」、「として(は)」、「について(は)」、「に対して」の扱われ方とその問題点を明らかにすることである。第三の目的は、コーパス調査と教材分析の結果をもとに、中国語を母語とする日本語学習者向けの総合教材における複合格助詞「にとって」、「として(は)」、「について(は)」、「に対して」を扱うと

き、日本語教育文法の観点から、必要な項目を考察することである。

本書の意義及び特徴は以下の三点である。

第一は、本書が大規模コーパス『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ^①)を利用し、日本語母語話者による複合格助詞の使用実態を分析した点で意味があると考えられることである。複合格助詞に関する研究はその認定基準や分類などに関する考察が多く見られるが、大規模コーパスを利用し、母語話者の使用実態を把握している考察はあまり見当たらない。母語話者の実際の使用実態を把握し、日本語教育に反映していくことが本書の主旨である。本書によって明らかにされた複合格助詞の先行名詞、後ろにくる述語はそのまま教育現場に持ち込めると思われる。

例えば、本書によって明らかにされる「に対して」の直後に述語動詞がきにくいという点は、学習者の誤用を防ぐという点において意義があると考えられる。また、「に対して」は「対象」を表す用法、「として」は「資格・身分」を表す用法が圧倒的に多いことも今回のコーパス調査で明らかになった。このような多義形式のどの用法が一番典型的な用法であるかについて、その認定が従来の内省からでは困難な点も、コーパス調査を用いれば可能となる。

第二は、教材分析によって得られる教材の問題点が今後の教材作成の際に、有益なヒントを与えられられることである。本書の考察によって明らかにされる教材の問題点「複合格助詞が使われる文型や意味用法の解説が不十分であったり、与えられていなかったり、誤解を招きやすかったりするということ、また対応する中国語訳とのずれや使用条件が提示されていないこと」は複合格助詞に限った話ではなく、現行の教材における文法項目を扱うときの一般的な傾向と言えるものである。これらの問題点を視野に入れること

① BCCWJに関する解説は1.3に譲る。

で、今後の教材開発に有益なヒントが提供できると思われる。

第三は、本書が日本語教育文法の観点から中国語を母語とする日本語学習者というある特定の言語話者向けの複合格助詞に関する教材開発を行おうとしている点である。中国語を母語とする日本語学習者の特徴を考慮しながら、複合格助詞をわかりやすく簡潔に提示していることが本書の最大の特色であり、意義があるところだと言えよう。また、本書の考察結果に基づいて作った日本語版と中国語版の「にとって」、「として(は)」、「について(は)」、「に対して」の文法ハンドブックは、自主学習しようとする日本語学習者や中国国内の現場の日本語教師がすぐに使えるようなものとして活用できると思われる。

2. 考察対象

本書では、主として日本語の複合格助詞「にとって」、「として」、「について」、「に対して」①を取り上げ、中国語を母語とする日本語学習者向けの教材開発を行う。これらの複合格助詞はいずれも「は」が付き得るが、「としては」、「については」は一つのまとまりとして、「として」、「について」と異なる用法を持ち(裴 2005、馬 2011など)、学習者にとって混同しやすいため、「として」と「について」を考察する際、「としては」と「については」も視野に入れなければならない。それに対して、「にとっては」、「に対しては」は主に「対比」を表しており、学習者には混同が生じにくいいため、考察の対象外とする。また、これらの複合格助詞には「も」もつき得るが、今回の考察対象とはしない②。研究範囲をこのように設定する

① 本論文はこれらの形式の連用用法を考察する。連体用法は別稿に譲る。

② ただし、「複合格助詞+も」は連用用法であるため、第三章から第六章までのコーパス調査をする際、このデータも利用することとする。

理由としては、以下の四点が挙げられる。

一つ目としては、どの教材でもこの四つの形式が導入されているという点である。

本書では中国国内の大学で広く使われている中国語を母語とする日本語学習者向けの以下の三種類の初中級総合教材を分析対象とする。

i. 《新编日语》(1993)上海外语教育出版社。四冊からなる。第1冊、第2冊、第3冊は各20課、第4冊は18課から構成されており、1990年代から中国国内の大学で広く使われている総合教材である。与えられている例文や文章が古いと批判され、新しく出てきた他の教材にその地位を譲ってしまった感もあるが、現在でも使っている大学がある。また、今中国の大学で日本語教育の中心を担っている三、四十代の教師たちが学生時代この教材を使って日本語を学んでいたということもあり、分析対象として取り上げる。

ii. 《综合日语》修订版(2005)北京大学出版社。四冊からなる。第1冊は第1課～第15課、第2冊は第16課～第30課の各15課、第3冊は第1課～第10課、第4冊は第11課～第20課の各10課からなる。中日が共同で開発した総合教材である。現在も広く使われているため、今回の分析対象として取り上げる。与えられている例文や文章は比較的新しいものである。

iii. 《标准日语初/中级教程》(2003)北京大学出版社。初級と中級各2冊からなり、初級上冊は1課～17課、初級下冊は18課～34課、中級上冊は15課、中級下冊は10課からなる。日本の東京外国語大学留学生日本語教育センター編の『初級日本語』、『中級日本語』をもとに開発された中国語版の総合教材である。中日両国で使われている教材の複合格助詞の扱われ方を見るために、分析対象として取り上げる。

以下、それぞれ《新编》、《综合》、《标准》と略する。これらの総

合教材は初中級段階の精読の教材として、日本語を専攻とする大学生の1 学年目と2 学年目で使われている。各教材における「にとって」、「として」、「について」、「に対して」の新出課を示したものが表1である。

表1. 教材における「にとって」、「として」、「について」、「に対して」の新出課

	にとって	として	について	に対して
《新編》	第1 冊第19 課	第2 冊第16 課	第1 冊第19 課	第4 冊第3 課①
《総合》	第2 冊第16 課	第2 冊第19 課	第2 冊第22 課	第3 冊第4 課
《標準》	初級第33 課	初級第29 課	初級第12 課	中級第2 課

表1からわかるように、取り上げた三種類の総合教材②ではいずれも「にとって」、「として」、「について」、「に対して」を一つの文

① 《新編》では「に対して」の「対象」用法は導入されておらず、第4 冊第3 課で「に対して」の「対比」用法が導入されている。

② 今回取り上げた三種類の総合教材にはいずれも教師用の副教材がない。これらの複合格助詞をどう教授しているのかを見るために、各教材を使用している何人かの現場の教師にインタビューした。すると、《新編》を使用している教師からは、ある文法項目に対する解説が与えられていないときは、他の文法参考書のその文法項目に関する意味解説を参考にしながら教授しているが、教材で意味解説が与えられている文法項目は基本的に教材に従う。《総合》を使用している教師からは、内容が多いため、その内容を規定の時間内で説明するだけで精一杯であり、基本的に教材以外の文法参考書は使わないとあった。《標準》を使用している教師からは、教材で取り扱われている文法項目が多いため、他の参考書の内容を採り入れる余裕がないといった声が返ってきた。インタビューの人数が少ないため、断言はできないが、現場の教師は基本的に教材に従って文法項目を教授している。また、市販の文法参考書は数多いが、大体教材と同じことが書かれている。教育現場ですぐ使える資料はなかなか見つからないという声も聞かれた。

法項目として、初中級段階で導入している。

二つ目としてはいずれも文法参考書や文型辞典でよく取り上げられている項目であるという点が挙げられる。

複合格助詞が取り扱われている文法参考書や文型辞典では、いずれも「にとって」、「として」、「について」、「に対して」を一つの文法項目として取り上げている。例えば、中国と日本で広く使われている文法参考書『日本語表現文型』(1989)、『日本語文型辞典』(1998)、『日本語文法ハンドブック』(2001)などではすべて「にとって」、「として」、「について」、「に対して」が個々に取り上げられている。

三つ目としてはいずれも日本語母語話者によってよく使われている形式であるという点が挙げられる。

一億語規模の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)から、そのオンライン検索ツールである「中納言」^①(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/search>)の長単位検索を利用し、各複合格助詞の出現数を調べてみると、その上位10位は表2のようになる。

表2からわかるように、BCCWJにおける各複合格助詞の出現数には大きな差が見られる。本書の考察対象である「にとって」、「として」、「について」、「に対して」はいずれもBCCWJにおいて、その出現頻度は上位6位以内に入っており、且つ出現数が1万例以上の形式でもある。

① 中納言では、「短単位検索」、「長単位検索」、「文字列検索」の三種類の検索方法を提供している。短単位・長単位・文字列の3つの方法によってコーパスに付与された形態論情報を組み合わせた高度な検索を行うことができる。本論文は必要に応じて、「短単位検索」、「長単位検索」、「文字列検索」を利用する。表2で挙げたのは中納言の長単位検索「名詞+複合格助詞」という検索方法で得られたデータである。

表 2. BCCWJにおける複合格助詞の出現数

順位	複合格助詞	出現数
1	として	136636
2	について	90636
3	によって	53142
4	において	45304
5	に対して	21668
6	にとって	19723
7	に向かって	7526
8	に関して	6533
9	を通じて	5238
10	を通して	5043

四つ目としてはいずれも中国語を母語とする日本語学習者が母語の影響などの理由で混同しやすい形式であるという点が挙げられる。

日本語の「にとって」、「として(は)」、「について(は)」、「に対して」はいずれも中国語の“对”か“对+アルファ^①”と対応しうる。例えば、「にとって」は“对”“对……来说”、「としては」は“对……来说”、「について(は)」は“对”“对于”、「に対して」は“对”“对于”と対応しうる。さらに、これらの形式は形式上の類似性(「にとって」、「として」)、或いは意味上の類似性(「にとって」、「について」、「に対して」は共に「対象」を表しうる)により、中国語を母語とする日本語学習者が混同しやすい形式と言われている(張 2001、沈 2009)。

① “对+アルファ”は“对……来说”と“对于”を指す。

3. 研究方法と資料

本書は、日本語教育文法の観点から複合格助詞に関する教材開発について研究する。森(2011: 14-43)では日本語教育文法のための研究手法として次の七つを挙げている。

- ①日本語教科書調査
- ②コーパス調査
- ③文法に関連する語彙の意味領域調査
- ④アンケート調査
- ⑤言語使用調査
- ⑥実験調査
- ⑦統計的検定の考え方と方法

①は、提出課と例文、練習問題のタイプ、日本語教科書をコーパスとして調べるという方法について述べたものである。

②は、研究目的によって、母語話者による書き言葉、話し言葉コーパスや学習者コーパスを利用し、分析するという方法について述べたものである。

③は、分類語彙表(国立国語研究所編 2004)や『日本語教育スタンダード試案 語彙』(山内他 2008)を用い、文法に関連する語彙の意味領域調査の方法について述べたものである。

④は、コーパス調査などに比べ、統計的検定を用いやすいアンケート調査という方法について述べたものである。さらに、アンケート調査は学習者に対してはテストになりがちであるし、母語話者にしても言語に対する規範的意識が障害となり現実の言語使用を反映した結果になりにくいいため、日本語教育文法研究では、アンケート

調査はその他の研究手法と組み合わせて、補佐的に用いるべきであると述べられている。

⑤は、日本語教育文法のための研究手法として定番となりつつあるコーパス調査と相互補完的な存在である言語使用調査について述べたものである。コーパスが「過去に書いた(発話した)」ものであるのに対して、言語使用は「実際にどう書くか(話すか)」というものである。言語使用調査では、どのような状況でどのように書くか(話すか)という環境を設定できるため、日本語学習者が「こんなとき日本語母語話者はどう使う」ということをピンポイントに調べることができる。また、「コーパスに出現しない形式は扱えない」というコーパスの弱点を補うことも可能であると述べられている。

⑥は、日本語教育文法研究として、ある意味、王道と言える研究手法である授業実験について述べたものである。

⑦は、コーパス調査、アンケート調査や言語使用調査で用いる統計的な検定の考え方について述べたものである。具体的な方法としては、SPSSやRといった統計パッケージを使用し、相違、相関などを調べる方法があると述べられている。

本書では森(2011)が指摘している七つの研究手法のうち、「コーパス調査」と「日本語教科書調査」を用いる。

具体的なやり方としては、まず、日本語母語話者の使用実態を見るために、母語話者コーパスから「にとって」、「として(は)」、「について(は)」、「に対して」の用例を取り出し、excelのピボットテーブルなどを利用し、これらの複合格助詞の先行名詞と後ろにくる述語を集計する。「に対して」と「として」はいくつかの用法を持っているため、各用法の分布も分析する。本書の考察対象である「にとって」、「として(は)」、「について(は)」、「に対して」はしばしば書き言葉として使われるため、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所が開発・作成した『現代日本語書き言葉均